

[論文] 女子学生の言語感覚
～6年間のアンケート結果に見る～

The Research on the Linguistic Usages of Female College Students

吉川 喬 岩下 美和*
Takashi Yoshikawa Miwa Iwashita

I. はじめに

大分県出身の村山富市氏(社民党)が総理大臣だったとき、「よだきい」という大分弁がマス・メディアに登場することがあった。何か辛いことがあると、つい大分弁が口をついて出たということであろう。それほど多くはなかったが、マス・コミもこの言葉を面白がって取り上げたきらいがある。それは、全国的にはそれほど馴染みのある言葉ではないが、村山氏のどこかひょうひょうとした顔とこの言葉が何となくマッチしていたということからかもしれない。

「おっくうだ」という表現をする方言は地方によっていろいろあるが、この言葉はそれまで、つまり村山氏が国会周辺で口にするまで全国的に知られた言葉ではなかった。ひょっとしたら全国の人にももう少し馴染んでもらえるかな、と思っているうちに村山氏は退陣となってしまった。

関西を中心として使われる「しんどい」は、辞書にも採用されているとおり今では全国どこでも使われる言葉になっている。元は関西の方言だとも思わずに使っている人もいるようだ。もう少し、村山氏が総理大臣を勤め「よだきいのう」を連発していれば、辞書に採用されるようになったかもしれない。

東京で生まれ東京周辺で育った筆者は、社会人になるまでこの「よだきい」という言葉は聞いたことがなかった。大分県で仕事をするようになった今から約40年ほど前、初めて聞いて感覚的にその意味するところがいかにもそれらしく感じるいい言葉だと思った記憶がある。

その後、しばらく大分県を離れ30年ぶりにこの言葉を聞いたとき、懐かしくまたいかにも大分県だという感じを持った。

大学で教鞭をとることになった初めての『国語表現法』の授業で、ある学生から「先生、『よだきい』という言葉は標準語ですか」という質問を受けた。言葉を知らないという驚きとともに、「よだきい」という言葉に、いい意味で何となくこだわりをもっているようなその質問の仕方にうれしさも感じた。方言は地域の文化そのものだ、という言い方がある。そのことで言えば、「よだきい」が共通語でないからこそ、素朴な質問をした学生にはこの言葉をもっと使ってもらいたいと思うし、そのことを通して、つまり言葉は文化だということを通して、大袈裟な言い方をすれば地域の文化を考えてもらいたいと思うのである。

言葉は生き物だという言い方もある。言葉はたえず動いている。変化をしている。時代とともに新しい言葉が生まれてくるし、ときに言葉の持つ意味も変化していくことがある。

平成10年11月に7年ぶりの改訂となった『広辞苑（第5版）』が、「茶髪」や「ばついち」といったいわゆる流行語を採用するというのは、そのことである。「茶髪」や「ばついち」は、使われ始めた一昔前、識者の間ではその社会的な現象を含め、決して受け入れられるものではなかったはずである。しかし、これらの言葉は、言葉としてそして何よりも社会現象としてすっかり定着してしまっている。社会現象として定着してしまえば、その状態を表現する方法（言葉）が必要であり、当然のように辞書も採用せざるを得なくなるのである。今の学生達は、たとえば「茶髪」や「ばついち」が、これまで辞書に採用されてはいなかった、また今回採用されるようになったなどということにはほとんど関心はない、と言ってもいい。辞書になくても、コミュニケーションを図る上で必要だからその言葉を使っているのである。

流行語は言葉の乱れの原因の一つだと言われる。「茶髪」も「ばついち」も言ってみればそもそもは流行語であり、世間では「乱れた言葉」という指摘を受けてきたことは間違いない。

『広辞苑』に採用されることにより、晴れて日本語としての認知を受けたという解釈ができそうだ。今後は、例えば「茶髪」も「ばついち」も、言葉としてではなく社会現象としてもっとも増えていくということになるのであろうか。

筆者は、こうした言葉の現象をとらえ、そのことをさまざまな観点から、大学の講義の一つ「国語表現法」の中で触れる機会を得ている。そのことに関連で、当大学コミュニケーション学科開設以来のこの6年間、新入生を対象に「言葉に関するアンケート」を実施してきた。

質問項目は一部を除いて毎年同じものであり、この6年間のアンケート結果を単純に集計し分析してみた。回答者は累計で485人となった。

以下は、そのまとめの報告である。

Ⅱ. アンケートの結果

1. 言葉の乱れ現象とその原因について

[日本語（特に話し言葉）は乱れていると思うか]

「日本語が乱れている」と言われるようになって久しい。特に話し言葉についてそのことが顕著だと言われる。事実、かつて筆者が勤務していたNHK放送文化研究所の調査でも、「言葉の乱れ」の実態とその原因が指摘されており（表1、2）、また一般的に「乱れ」を指摘する声は年とともに増えてきていることがわかる（表3）。

〈表1〉

☆日本語は乱れていると思うか	
・非常に乱れている	…… 22.7%
・多少乱れている	…… 66.6
・あまり乱れていない	…… 9.1
・まったく乱れていない	…… 0.5
・わからない・無回答	…… 1.1

〈表3〉

☆日本語の乱れの指摘	
・昭和54年	…… 71%
・ 61年	…… 76
・ 63年	…… 88
・平成 1年	…… 89

〈表2〉

☆乱れている点は何か	
・おかしな話し方や変な流行語が多くなった	…… 68.9%
・敬語の使い方が乱れてきた	…… 65.4
・女性の言葉が荒っぽくなった	…… 63.5
・意味のわからない外来語や外国語が多くなった	…… 58.6
・言葉の間違った使い方が多くなった	…… 47.9

*表1、表2は平成1年『第3回言語環境調査』の結果による

このことを学生達はどのようにみているのか。年により数字に多少の差はあるが、平均して「乱れ」を指摘する声は86%（「非常に」19%、「ある程度」67%）である〈図1、2〉。

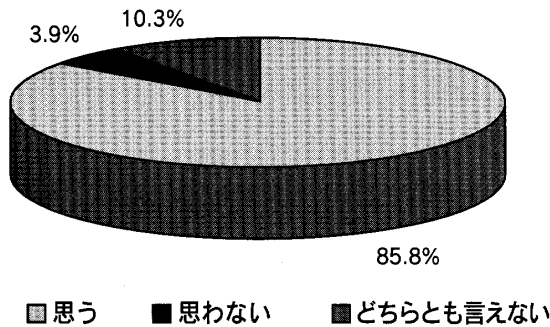


図1 日本語が乱れていると思うか

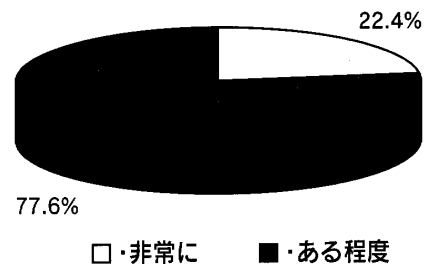


図2 図1で思うと答えた人

新入生は高校を卒業したばかりで、言葉に対してまだそれほど関心を持っているとは思えないが、それでもこの数字である。想像以上に言葉は乱れていると言っても過言ではない。この種の多くのアンケートが示す「乱れの原因」は、「流行語」「カタカナ語」「敬語」「女性の言葉」などである。

一説によれば、この日本では毎年約1万語の流行語が誕生していると言われる。多くはやがて消えていく運命にあるが、逆にまたその多くはしばらく人々の口にのり、一時言葉を乱す原因となる。そして、運がよければその中にやがて辞書に採用されて日本語として定着するものもある。

流行語の誕生の中には、昨今流行のカタカナ語も含まれる。日本語と外国の言葉（外来語）との付き合いは、1543年（天文12年）、ポルトガル人が種子島に漂着して以来だと言われているが、それ以来の言葉の長い歴史の中で私たちが「外来語」として親しんできた言葉以外に、今私たちがカタカナ語と呼ぶ言葉があまりにも増え過ぎてはいないだろうか。諸外国から移入する新しい物、新しい考え方など、本来の日本語に置き換えることができない言葉（物）は別として、外国語をそのままカタカナで標記してしまったり、和製英語を作ってしまったたり、言葉に関してやや安易な姿勢が目立つ、と言える。そのことが、つまり言葉に関する安易さが、本来の日本語のそのものを、また日本語の体系を崩して行っている、そこが“乱れ”と指摘さ

れるものである。

敬語については、別項でも触れるが、年代が下がるにつれて正しい使い方が分からなくなっている、と言える。例えば、平成9年12月に文化庁が実施した『国語に関する世論調査』の中で、「敬語は美しい日本語として、豊かな表現が大切にされるべきだ」という質問に関し、60歳以上の男性46%が「そうだ」と答えているのに対して、20歳代は36%、10代後半は30%となっている。また「敬語は伝統的な言い方をできるだけ守っていくべきだ」については、「賛成」は60代以上が42%、20代は36%、そして20代は29%となっている。この結果を見ても、明らかに年代によって敬語意識は違うと言える。

女性の言葉の乱れ現象については、女性の社会参加が目立ち、職場でも男性と対等に仕事をこなす人が増えてきた結果そこで使われる言葉が男性化し、したがって女性らしい言葉遣いが失われてきている、という指摘ができると思う。

〔前項で「乱れている」と答えた人。乱れの原因は？〕

そこで、前項で「乱れ（非常に）（ある程度）」を肯定した学生達が思う乱れの原因は何か、あらかじめ設定した10の選択肢から複数で求めた回答は〈図3〉のようになった。

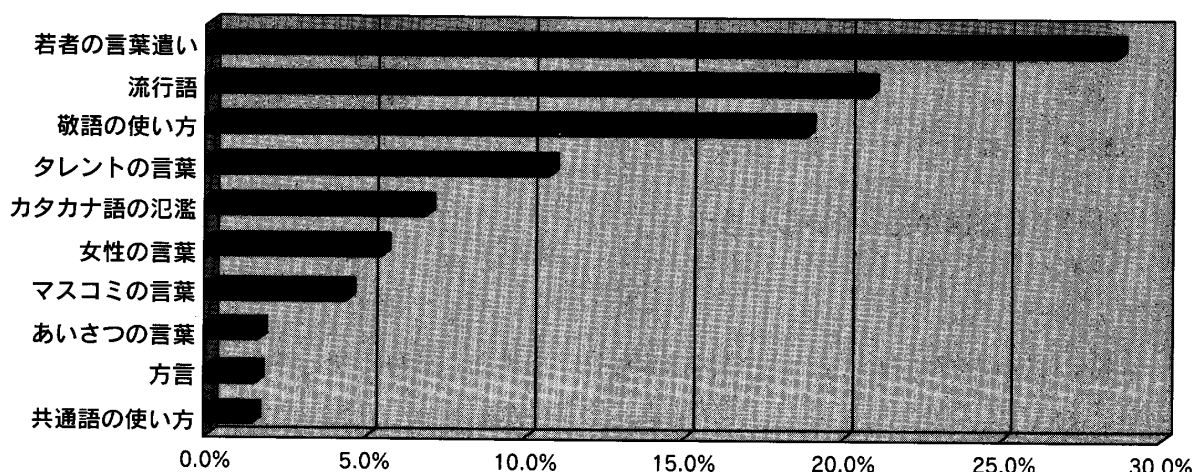


図3 乱れの原因

自分達が日常使う言葉、つまり「若者の言葉遣い（29%）」を第一に上げ、ついで「流行語（21%）」だという。この2点は共通している。同じだと考えていいかもしれない。つまり、若者達は、その言葉が正しいかどうかの判断は別にしてたえず新しい言葉・表現（流行語）に飛び付き使っている。若者の言葉＝流行語と考えれば、この二つが乱れの原因の上位を占めるのは至極当然のことである。

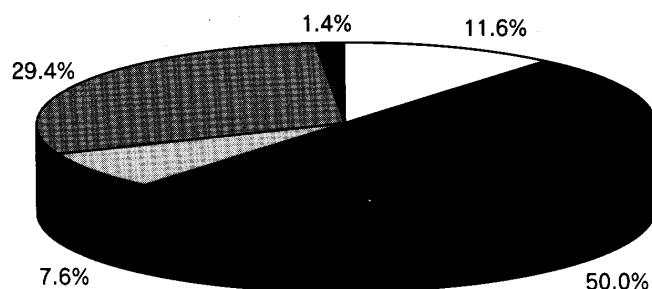
乱れの原因の中に「マス・コミの言葉（4%）」「タレントの言葉（11%）」があるが、いずれも%は低い。流行語や流行的な表現、おかしな表現・言い回しなどはその多くの出所がお笑いタレントであり、したがってマス・コミであるのだが、このアンケートを見る限り学生達はそのままで溯って原因を考えてはいない。深く考えないうちに、言葉はごく自然に身に付いてきているということなのであろう。はじめから自分の言葉になりきっているとと言える。

「敬語の使い方」を乱れの原因として指摘する声が19%とかなりあるが、このことはⅢで

触れることとする。

乱れの原因として、「女性の言葉」つまり「女性の言葉が乱暴になってきた、つまり女性の言葉が男性化してきた」ということは一般的にはかなり指摘されているが、若い女子大生のこのアンケートではそのことを指摘する声は少ない（6%）。このことは、あとの質問項目とも多少関連している。

〔日常自分の使う言葉について、乱れの程度は？〕



- いつも乱れている
- ときに乱れることがある
- ▨ どちらとも言えない
- 気にならないが、乱れることがあるかもしれない
- 乱れることはない

図4 自分の言葉の乱れについて

いう答えはこのことを示しているのかもしれない。つまり、友達同士の話し合いでは、同じような言葉（方言なり、流行語なり）を使うことによって、中身の濃いコミュニケーションを図ることができるのである。「気にならない……」は「気にしていない……」ということであろう。結果として、ふと考えてみると「乱れているのかもしれない」と言っているのだ。

ここで、「どちらとも言えない（8%）」という人は、おそらく何を基準にして「乱れ」をみるのかということが分からない、と言いたいのであろうと思われる。確かに、一定の基準、例えば辞書などに照らして言えば、それをはずれたところに「乱れ」があるという指摘はできそうだが、だからといってその場合すべてが乱れだとも言えない。つまり、方言は辞書に載っていないのである。本来、人々が使う言葉は、言ってみれば大なり小なり方言である。方言は乱れた言葉では決してない。そこに、「乱れ」を考える難しさがある、と言える。確かに、方言、もしくは方言に近い言葉を使う場合、「どちらとも言えない」ということになるのであろう。

ところで、「乱れ」を否定することは勇気のいることではないかと思うのだが、アンケートの結果ではこの6年間で、「乱れることはない」と言い切った人が7人いた。1年1人である。言葉を使うことによほど自信を持っているということになるだろうか。

〔他人（特に友達）の使う言葉については、どのように思うか〕

この結果を見ると、前項の自分の「乱れ」ほど他人の「乱れ」は気にならないらしい。「気

になる」と答えた人は35%（大変2%、少し33%）、全体の約3分の1にしか過ぎない（図5）。自分の言葉の乱れを肯定した人が60%を超えていたことからみると、相手の乱れが気になるという人が30%を若干超える程度であるというのはある意味では面白い。他人にあまり深入りしない、あたりさわりのない付き合いをするという近ごろの風潮が、ここに現れているのだろうか。

前項の結果とは違い、「気にならない(39%)」人のほうが若干多い。

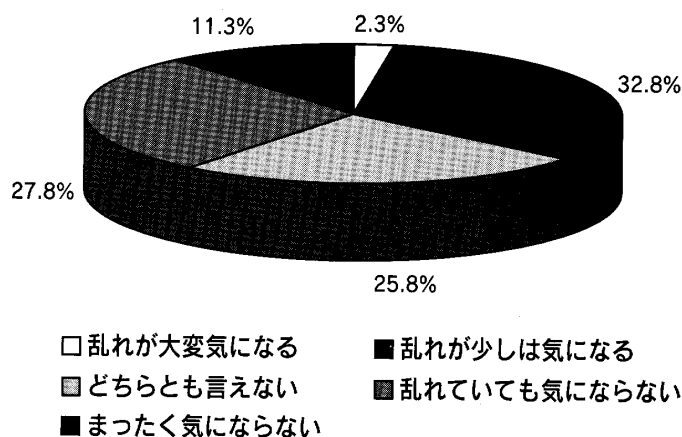


図5 他人の言葉の乱れについて

【自分の使う言葉はどこで（だれに）影響を受けるか】

NHK放送文化研究所の調査に、「標準的な日本語とは」というのがある（表4）。

〈表4〉

☆標準的な日本語は次のうちのどれか	
・アナウンサーの言葉……	68.5%
・先生の言葉……	10.7
・作家の言葉……	3.0
・新聞の言葉……	53.8
・教科書の言葉……	43.1
・役所の言葉……	2.7
・東京の言葉……	9.1
・標準的な言葉はない……	11.0
・その他……	0.1
・わからない・無回答……	3.5

この結果は、「話し言葉」の規範は主として「アナウンサーの言葉」「先生の言葉」にあり、「書き言葉」のそれは「新聞の言葉」であり「教科書の言葉」である、ということを示している。

確かに、NHKでは放送法第3条3（番組基準）による日本放送協会国内番組基準の第10項に「放送の言葉は、原則として標準語による」と明示している。現在では、放送における表現者多様化の時代であり、放送で使われる言葉が必ずしも正しい言葉だけとは限らないが、例えばアナウンサー、キャスターという肩書きのつく、それなりの言葉の訓練を受けた人々の言葉・表現は

いわゆる標準語（正しい共通語）であり、「話し言葉」の規範となっていることは間違いない。

また、新聞は、130年を超える長い歴史の中で言葉・文章表現の改善をそれなりに重ねてきており、それが「書き言葉」の規範となっていることについて議論の余地はない。

新聞と文章の関係をみると、例えば大阪毎日新聞が明治35年1月1日の社説から、それまでの難しい文語体を口語体に変え、大正9年からは紙面全体を完全な口語体に変えたという歴史の流れをみても、新聞は率先して正しい文章言葉の普及の一端を担ってきたということがはっきり分かる。また、教科書が規範となるのは至極当然のことである。

その上で、日常使う言葉の善し悪しは別にして、どこでどのように影響を受け変わっていくのか聞いてみた（図6）。回答は複数で求めている。

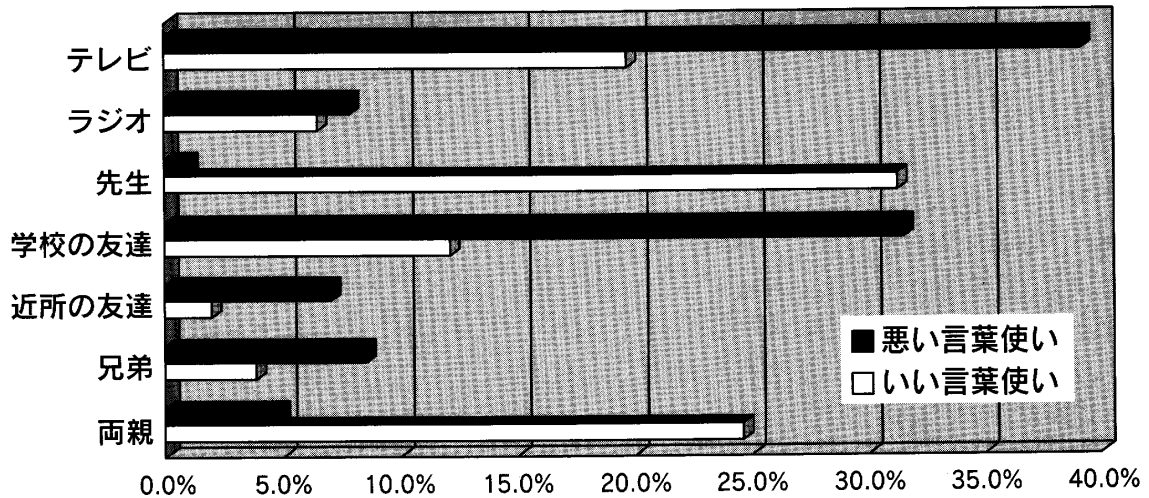


図6 言葉の影響

いい影響を受けるのは、まず第一に学校の先生（31%）であり、ついで両親（25%）となる。以下、テレビ（20%）、学校の友達（12%）と続く。以下の項目については、この4項目に比べれば数値は低い。

両親の影響は圧倒的に「いい」方が多い。結果としてこれは喜ばしい。ただ、このことは、言葉に関して両親の責任が重いということを示す結果とも言える。

学生たちの言葉遣いを見ていると、筆者の経験では、ある程度家庭環境が見えるし、親の使う言葉の程度もわかる。

両親と同様、先生の言葉遣いからいい影響を受けるという回答が多い。特に、小学校の場合、子供たちはあらゆる面で先生を信じ、頼っていると思われる。その一つに“言葉”があると言えるだろう。だとしたら、先生方は、自分の使う言葉によほどの責任を持たなければならないことになるのだが、果たしてどうだろうか。

一方、悪い影響は、第一がテレビ（39%）で、ついで学校の友達（32%）となる。以下の項目については、極端に数値が低くなり影響が少ないことを示している。

面白いのはテレビである。同じ電波メディアでもラジオの影響を上げる人がすくないのは、接触率の違いということが言える。平成7年度『NHK国民生活時間調査』によれば、マス・メディア接触時間は週平均で、テレビは3時間28分、ラジオ24分である。同じように話し言葉が使われているのだが、この接触率の違いが影響度の違いを表している。

それでは、テレビはなぜ「いい」「悪い」両方の影響が大きいのか。

「いい」影響というのは、プロとして言葉の訓練をそれなりにきちんと受けているアナウンサー・キャスター・リポーター・解説者などという肩書きを持った人の言葉である。外国人に日本語を教える日本語学校の先生は、外国人にNHKのニュースを見る（聞く）ことを勧めると聞いたことがある。“そこに正しい日本語がある”ということであろう。

筆者が中国語の勉強を始めたとき、言葉の専門家から北京放送局のアナウンサーの発音を聞くことを教えられた。また、つい先日訪れたイタリアで、ガイドのファウストさんが、「イタリア人の多くがしゃべるイタリア語はイタリア語ではない」という言い方をしたのを聞いてびっくりしたが、ややオーバーな言い方とはいえ、つまり正しいイタリア語は放送局のアナウ

ンサーのしゃべる言葉だという説明を聞いて納得したものだ。このことは、十分に研究をしたわけではないが、多くの国について言えることなのかもしれない。

一方で、悪い影響の第一がテレビというのはいかか。放送の世界は、正しい日本語を話すプロがいる一方で、必ずしも十分な言葉の訓練を受けていないセミ・プロ的なリポーターが登場したり、つまり表現者多様化の時代と言われる中で、放送の言葉が必ずしも正しいとは言えなくなってきた。その上、大勢のタレントたちが使う、面白い・おかしい・不思議な・奇妙な表現が、機関銃から発射される弾のように発信され続け、それが流行語としてあるいは若者言葉としてある程度の定着をみるのが日常的によく見られる。そのことを承知の上で使いながら、結局のところ「悪い影響」を受けることになっていく。かつて、放送の言葉はいい意味での規範だった。しかし、今は必ずしも規範とはなり得ない状況にある、と言わざるを得ない。

学校の友達の使う言葉については、「いい」「悪い」の影響がテレビと同じように出てくるのは、これも接触の度合いの強さということからであろう。人は、成長するにしたがって、人との付き合いの幅が広がり、また深まっていく。そのとき使われる言葉は、必ずしも正しい言葉だけではない。いや、むしろ雑な、乱暴な、俗っぽい、打ち解けた表現になるはずである。そのほうが、友達同士ではコミュニケーションを取りやすい。したがって、ここでは「影響」を受ける場合、「いい」よりは「悪い」方が多いと言う結果になるのである。

2. 敬語をどう考えるかについて

[敬語の使い方について]

敬語は難しいと言われる。

筆者は、毎年度当初授業を始めるに当たって、学生たちから「言葉に関する質問」を求めることにしている。学生たちが、言葉に関してどの程度の知識をもっているか、あるいは考えているかを知るためである。他愛ない、また単純な質問から、高度な質問まで、質問は多岐にわたるが、質問の中で圧倒的に多いのが「敬語」に関するものである。

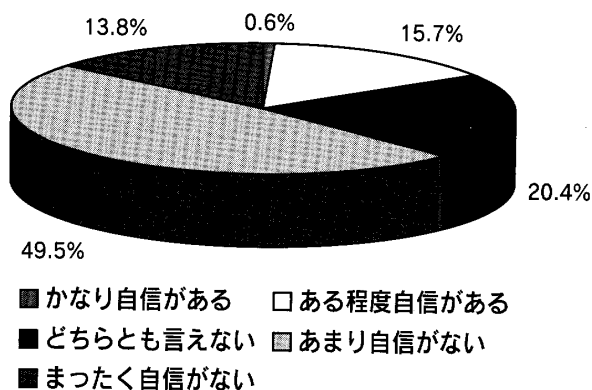


図7 敬語の使い方

例えば、「尊敬語と謙譲語の区別がつかない」「どんなときに尊敬語を使うのかわからない」「目上の人には必ず尊敬語を使わなければならないのか」など。

敬語については、学生たちがいかに知らないか、そしてやがて社会人となるこの段階でいかに悩んでいるかがよくわかる。

したがって、〈図7〉でわかるとおり学生たちは敬語に関して「自信がない(63%)」という。「自信がある」のはわずかに16%でしかない。それもほとんどが「ある程度」

となる。

言葉の乱れの調査で、常にその原因の一つに上げられる「敬語」である。それほど言葉を深く考えたことのない学生たちが、自信がないのは当然かもしれない。例えば、動詞の尊敬表現でも多くの学生が使えるとして、せいぜい「レル敬語」どまりである。つまり、「動詞の未然形+敬意を表す助動詞」、例えば「話される」「書かれる」の形である。この形より幾分敬意の度合いが高いとされる「お+動詞の連用形+になる」、例えば「お話しになる」「お書きになる」などの「ナル敬語」表現はなかなかできない。

この「レル敬語」をサラリーマン敬語だと言った人がいるが、それはつまり「レル敬語」は原則としてすべての動詞に応用がきくからである。この基本的な形さえ教わればまず間違えることはない。だれでも尊敬表現が使えるということである。ただ、この表現を連発されると、筆者はなんとなく背中がむずむずする感じがしてしまう。いかにも敬語を無理に使っているというように聞こえるからであろうか。普段使い慣れていない敬語を、時に使おうとすると当然のように戸惑いが生じる。「木に竹を継いだような…」という表現があるが、学生たちが敬語を使うとまさに「木に竹…」の敬語表現になりかねない。身についていないからである。

【敬語を使うとき】

前項で多くが「自信がない」というのは、敬語を使うときに「考えながら話す（53%）」と「ある程度考えないと出てこない（20%）」を合わせると70%を超える（図8）ことでよく分かる。ここで「どちらとも言えない（17%）」という人は、恐らく自信があるわけでもなく、かといって自信がないわけでもなく、わからないままなんとなく使っているということになりそうだ。敬語は難しい、と言われる理由がそこにある。

平成9年12月に、文化庁が実施した「国語に関する世論調査」の結果の一つとして、マス・メディアの多くが取り上げていた次のような例を見てもわかる。

……「先ほどAさんがお話しされたように……」が、謙譲語（お話しする）に敬意を表す助動詞（レル）をつけた言い方であり、尊敬表現としては正しいとは言い難い。しかし、一般的には正しい尊敬表現だと思われる（72.6%が正しいとした）。……

ここに、敬語の難しさがあるのであり、確かに、正しい敬語が身につけていなければ、すらすらしゃべれるものではない。同時に、文法的に間違っている、自分では正しいと思込み、また多くの人が使っている間違いに気づくことはない。敬語の怖さとも言えそうだ。

敬語の使い方でもう一つ言えることは、マニュアル化した敬語だけを覚えると、それだけで十分だと思、応用がきかなくなることがあるとい

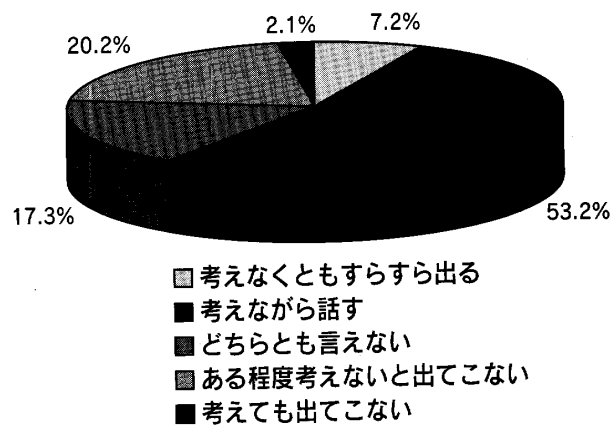


図8 敬語を使う時

うことである。学生たちは、サービス業でアルバイトをすることがある。文化庁の平成9年1月の『国語に関する世論調査』によれば、人が敬語を身につける場所は、①学校（55%）、②家庭（55%）、③アルバイトを含む職場（51%）の順となる（複数回答）。

客商売であれば、学生のアルバイトとはいえ「言葉」の教育をする。その中に「敬語」がある。そこで教わる敬語は、お客さんに対して必要最小限のものとなる。相手に必要な情報を伝える敬語は使えるが、相手に質問されたとき、その答えが教えられたパターンにない場合、ある程度の答えはできたとしても、それまで丁寧な言い方をしていたのが突然おかしくなる、といったようなことである。敬語とは何か、ということが基本的に身につけていないと、応用がなかなかきかないということだ。

学生たちが、アルバイトを通して敬語を学ぶことはプラスだとしながらも、むしろそこから敬語の深さ・複雑さを知り、かえって敬語アレルギーになってしまうことがある。

【目上の人（先生・先輩など）に対して敬語は？】

敬語表現はどのような場合に使うのかということに関して、この項目の回答「必ず使う」と「ある程度使う」とを合わせ84%が「使わなければならない」と肯定しているのを見ると、学生たちはある程度理解しているということが言えそうだ。

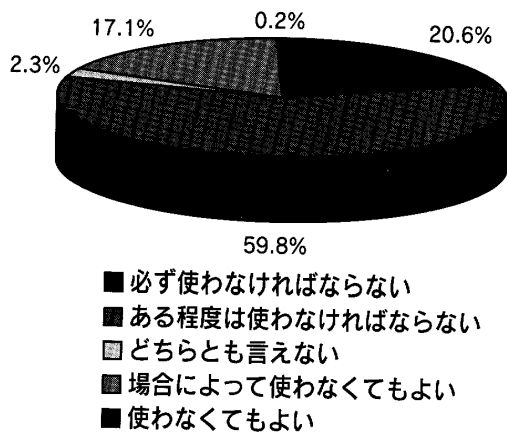


図9 目上の人への敬語

敬語を使うとどこかよそよそしい感じになると言われることがある。確かに、敬語表現は、上下、親疎の関係で微妙に変わるもので、したがって、上下、親疎の関係が近くなれば必ずとそこで使われる敬語表現も度合いが低くなると言っている。そこに回答の一つ「場合によっては使わなくてもいい（17%）」が出てくるのである。「使わなくてもいい」は極端だが、ここは「場合によっては敬意の度合いを低くしてもいい」となるのであろう（図9）。それほど敬語表現は、言葉そのものの使い方もさることながら、使う人の態度・心・表情が深く関わっていると言っても過言ではない。つまり、敬語は単に言葉だけの問題ではなく、人そのものだと言えるだろう。もちろん、言葉（話すこと）は単に言葉だけの問題ではなく、人の心そのものだと考えておく必要がある。

日本語の敬語の難しさがここにある。一口に敬語表現と言っても、相手によって、あるいは時と場合によって、その表現の仕方は変わるものである。変える必要がある。使わなければ失礼になる場合があり、また、逆に使い過ぎると慥慥無礼になる恐れもある。

したがって、敬語表現は十分自分のものになっていないと、使い方によって時に危険を伴うと言っているだろうか。その人の姿勢を問われる、また教養の程度を疑われるということもあろう。「敬語の使い方に自信がない」とする学生が6割を超えているという実態からみても、

したがって、敬語表現は十分自分のものになっていないと、使い方によって時に危険を伴うと言っているだろうか。その人の姿勢を問われる、また教養の程度を疑われるということもあろう。「敬語の使い方に自信がない」とする学生が6割を超えているという実態からみても、

学生たちにはそのことがはっきり言えそうだ。

3. 人前で話すということについて

[人前で話をする自信はあるか]

近頃の学生は、教室で物を言わない、あるいは言えないとよく言われる。私語は別にして、先生から質問されたとき、答えがなかなか出て来ない。したがって、質問の意味がわかっているのかいないのか、よくわからない。答えたとしても、まず声が小さい。答え方が論理的でない。もっと言えば、ただ単語が口をついて出てくるだけ、となる。答えが文章になっていないことが多い。

例えば、敬語表現に関して次のような質問をする。

……『私どもの社長が明日そちらへ行きたいとおっしゃっています』という文章の間違いを指摘し、正しい言い方にしなさい。その際、なぜそこが間違っているのか、なぜそのようにするのかを明確にしなさい」と。

多くの学生の答えは、「『行きたい』を『伺いたい』に変える。『おっしゃって』を『申して』に変える」である。これは、敬語表現がある程度わかっている場合、あるいはなんとなくわかっている場合である。“答え”としては間違いではない。しかし、“答え方”としては必ずしも十分ではない。

この場合、筆者はつぎのように答えてもらいたいと期待する。

すなわち「間違いは2点あると思います。一つ目は『行きたい』です。『行きたい』という表現は文法上間違いではありませんが、この場合謙譲表現『伺いたい』を使ったほうが相手に対してはいい印象を与えます。二つ目は『おっしゃって』です。これは、尊敬表現ですから、相手に対して身内である社長の言動を表現する仕方としては間違いです。ここは、謙譲表現を使わなければなりませんので『申して』に変えます」である。一つの質問に対してきちんと答えようとすると、これだけ長くなるはずである。ここまできちんと答える学生は残念ながらほとんどいない。

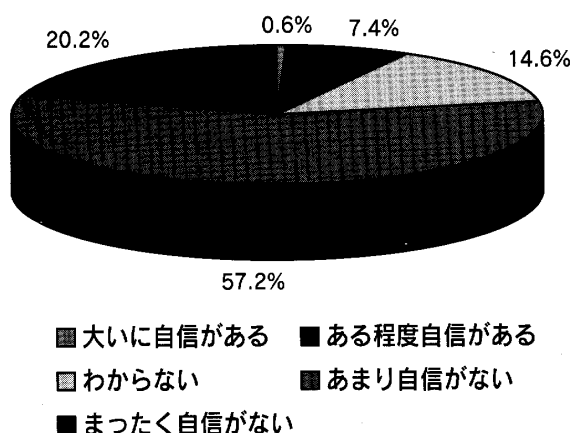


図10 人前で話をする自信

学生たちは、人前できちんと言葉と内容を整理して話すことが苦手である。それは、小・中・高校の国語の教育の中で「話す・聞く」という教育がおろそかにされていた、逆に言えば「読む」「書く」という教育に力を入れ過ぎていたという経緯があるからではないか。

また、一般的に日本人は議論下手だと言われる。最近になって「ディベート」の訓練が必要だなどということも言われるようになってきた。学生達の「ディベート」の大会なども

開かれるようになってきた、と聞く。

ところで、文部省は、平成4年6月に開かれた国語審議会の報告を受けて平成5年度から国語教育の中でこの「話す・聞く」という点での教育を強化する方針を打ち出した。国語審議会の答申は「自分の考えをまとめてきちんと発表し、人の意見を相手の立場で理解することが大切」と、「話すこと、聞くこと」の教育の必要性を指摘したものである。簡単に言えば、小学校では「大きな声の音読を通じ、言いたいことをきちんと伝える」、中学校では「言いたいことを整理し、論理的に話す」、高等学校では「スピーチや討論などの説得力を高める」という。明治以来の国語教育の中でほとんど顧みられなかったことをやろうとしているのだが、結果が出るのはかなり先になりそうだ。

もし、何年か先にこうした教育の成果がいい結果を生み出せば、この項目の回答はいい方向へ変わるに違いない。

人前で話すことに多くの学生が「自信をもっていない(77%)」。「自信がある」と答える学生は、ほんの数人である(図10)。

おしゃべりは得意だが、まとまった話を人前ですることは苦手だ。つまり、「話をする」ということは単なる「おしゃべり」とは違う、ということである。

[自分の考えを論理的に述べる自信があるか]

どうやら人前で話すことは、自分の考えを論理的に述べることと同じであるらしい。つまり、前項の回答とこの項の回答とがほとんど同じだということである。「人前で話すことに自信がない」人は、「論理的に述べることに自信がない」と答え、「論理的に述べることに自信がない」人はつまり「人前で話すことに自信がない」と答えているのである。

したがって、「自信がない人」が78%（「あまり(46%)」「まったく(32%)」）もいるのは、前項の「自信がない(78%)」と同じである(図11)。

文章に起承転結がなければならぬように、話にも起承転結があることが望ましいということになる。すなわちこの起承転結が論理的ということである。確かに、話の上手な人の講演を文字化すると、書いたものと同じような文章になっている、と言われることがある。当然のように、学生たちの単なるおしゃべりにはほとんど論理がない。

「話し方・聞き方」を学ぶ上で必要なことは何か

前にも触れたとおり、学生たちは大学までの教育の中で「話すこと・聞くこと」に関する教

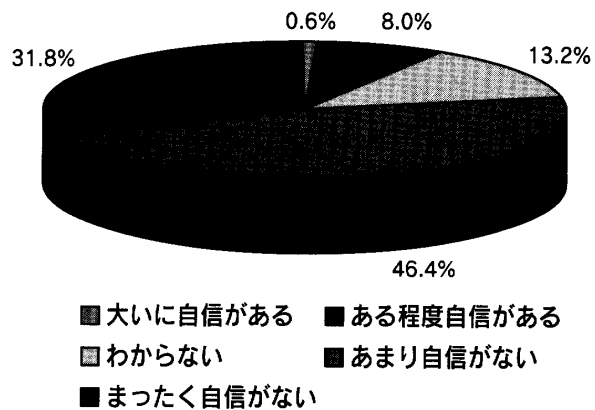


図11 論理的に述べる自信

育をほとんど受けていない。そうした教育があったとしても、教育現場で力の入れ方が違うと言ってもいいかもしれない。

近頃、コミュニケーションという言葉がよく使われる。英語本来のコミュニケーションは「伝達・通信・話し合い」という意味であるが、われわれが日本語として解釈しているコミュニケーションは「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」（広辞苑）であり、もっとやさしく言えば「気持ちや意見などを、言葉などを通じて相手に伝えること」（岩波国語辞典）である。コミュニケーションは、文字や言葉なしではほとんど成り立たない。言葉や文字があるからこそ、人と人の間にコミュニケーションが成立するのである。

この小論では、話す言葉を中心に考えてきたが、コミュニケーションとは何かと考えるとこれまで検討してきた「言葉」がいかに大事かということがよくわかる。まず言葉があり、その上で話すという行為があって初めてコミュニケーションが成立する。

ここでは、複数で回答を求めている（図12）。コミュニケーションの基本である言葉については、「適切な言葉の選び方（18%）」に比較的多くの回答が寄せられている。「適切な」というのは「わかりやすい」と言葉を置き換えてもいいと思う。そして、その上で話し方については、「わかりやすい話し方（20%）」「相手の立場に立った話し方（12%）」「正しい話し方（11%）」の順になる。選択肢は10あるが、この話し方については、まとめてみれば「わかりやすい話し方」ということになる。「正しい」「わかりやすい」「相手の立場」は、いずれも相手に伝わる話し方を意味している。上手に話すことが、必ずしも伝わる話し方ではない。

「敬語の使い方（15%）」にも比較的回答が多いのは、これまで見てきたとおりである。この回答は、そのことを裏付けている。

また、昔から「話し上手は聞き上手」と言われるように、「聞き方（14%）」についても回答は多い。人の話をどのように聞いたらいいかという「聞き方」を学べば、「相手の立場に立っ

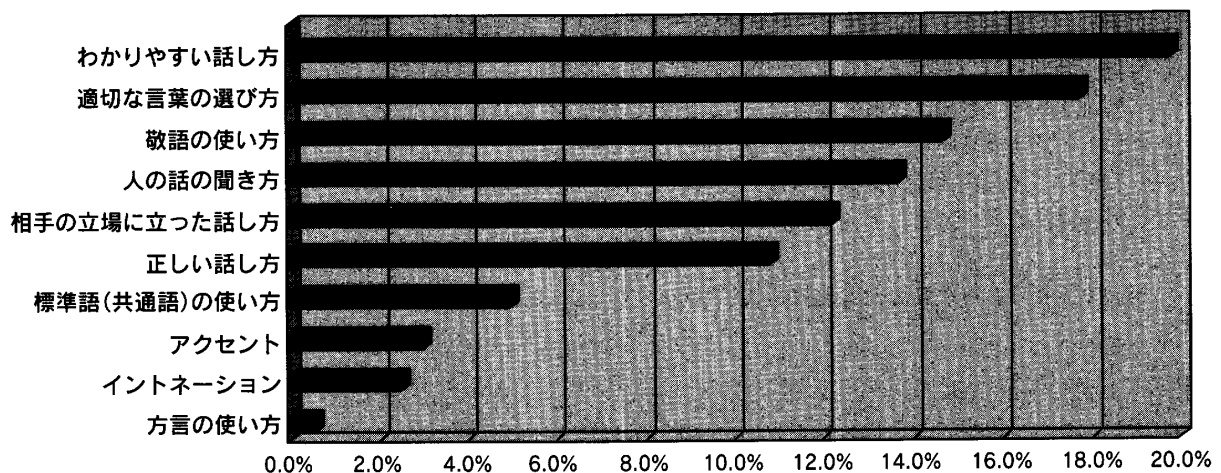


図12 「話し方・聞き方」を学ぶ上で必要な事

た話し方」がわかるというものである。「アクセント（3%）」や「イントネーション（3%）」も話す上での要素としては重要であるが、人によっては枝葉末節だと言う。日本語は、一つの言葉に複数のアクセントが認められていることもあり、またイントネーションは地方によって特徴がある。いずれも、正しくなければ通じないということはない。「標準語（共通語）」の使

い方（5%）」も回答が少ないのは、必ずしも完全な共通語でなければ話が通じないとは思っていないからであろう。また、共通語について言えば、冒頭の「よだきい」については例外的なものであり、一般的には現代社会では、多くの人、少なくとも教育が徹底している日本で、またマス・コミがこれほど発達している中では、だれもが共通語的な話し方はしていると思っているのである。

Ⅲ. おしまいに

以上見てきたのは、若い女子学生達の言語感覚の一端である。このデータをもってすべての学生の言語感覚を決めることはできない。大都会と地方と、また都会生活の経験のあるなし、大分県から一度も外へ出て生活をしたことがない、などさまざまな要因を考慮に入れて分析すべきものである。

ただ、この質問項目は、かつて筆者が関係していたNHK放送文化研究所の用語研究グループが用いたものを基に作成したもので、その分析結果と比較してもそれほど大きな開きはない。

冒頭にもふれているが、このデータは平成5年から10年までの6年間に当短大に入学した1年生を対象にしたアンケート調査の結果に基づいて単純に集計し、分析したものである。なお、この調査については今後も引き続き継続して実施していきたいと考えている。

〈参考文献〉

- 文化庁『国語に関する世論調査』（平成9年1月、12月）
- NHK『放送研究と調査』（NHK出版）
- 読売新聞記事（読売新聞）
- 菊地康人著『敬語』（角川書店）
- 毎日新聞100年史（毎日新聞）
- 1995年『国民生活時間調査報告書』（NHK放送文化研究所）
- 外山滋比古著『ことばと人間関係』（チクマ秀版社）

※岩下美和 大分県立芸術文化短期大学コミュニケーション学科 平成9年度卒業 現在同学科副手